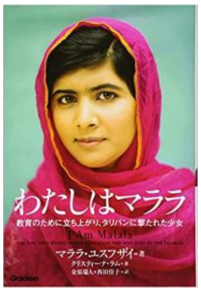
2020年10月館員おすすめの本

『わたしはマララ』（マララ・ユスフザイ）

吉田　梨紗



マララはパキスタンのスワート渓谷というところに住む普通の女の子。タリバンに支配されたパキスタン人女性は制約だらけの暮らしを送らなければならず、理不尽な思いをしています。ある日、マララはタリバンに頭を撃たれ瀕死の状態になります。しかしその9か月後NYの国連本部で教育の大切さを訴える演説をしたのです。実際にこのニュースを見たことがありました。女性だからという理由で教育を受けることができず理不尽な扱いを受け、更にテロリズムにより過酷な生活を強いられているパキスタンの現状を知りました。

当時15歳の少女が自分は大変な目にあったのにもかかわらず、人々の平等な権利を訴えるために立ち上がったその勇気に強く心が打たれました。教育の大切さや人権についてとても考えさせられる一冊です。（Gakken）

『旅のつばくろ』（沢木耕太郎）

原　真由美

若い頃、ユーラシア大陸を乗り合いバスで横断するという経験をした著者は、国外への旅にばかり目を向けてきたけれど、原点は少年時代の東北一周一人旅だそう。時を経た今、思い出の地を再び訪れたエッセイです。冒頭の章には、私の友人が住む山形県の日本海に面したとても小さな「遊佐町」が取り上げられていて感激。文字の美しさにひかれたという予想通り、雄大な鳥海山がそびえ水田が美しい土地だったそう。自由に行き来することが難しい今、また出かけられるようにとの願いが込められた一冊。旅の心構えは偶然に身をゆだねることだそうです。（新潮社）

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（伊藤亜紗）

大久保美玲

目の見える人は、目が見えないとさぞかし不自由だろうと思ってしまいがちですが、目の見えない人には、そうでない人には知らない豊かな世界が広がっていることを本書は教えてくれます。例えば目が見える人は、情報を常に視覚から頭の中に流すような状態になっていますが、見えないことによって脳に余裕ができ、視覚に踊らされない安らかさがあるといいます。その感覚が私の中で胸にストンと落ちたとき、視界が広がるような衝撃を受けました。コロナ禍で世界の価値観が一変する瞬間に立ち会った経験によって、異なる感覚を持つ人々の世界についても想像しやすくなっているのかもしれません。そんな今だからこそ、是非手に取ってほしい一冊です。（光文社新書）